

日本音楽知覚認知学会2019年度秋季研究発表会
 場所：八戸工業大学 メディアセンター (https://www.hi-tech.ac.jp/life/campusmap/)
 世話役：武山泰 (八戸工業大学)

11月9日 (土)																															
10:00	理事会	場所：メディアセンター2階																													
12:30	受付開始																														
13:00	開会挨拶 (5分)																														
13:05	ICMPC企画	パネルディスカッション「Music Science Frontiers: ICMPC16th in TOKYOの講演企画に向けて」																													
14:50	休憩 (10分)																														
15:00	ポスター口頭説明 座長：正田悠 (神戸大学)	ポスター発表者による概要紹介 (1人1分程度)																													
15:10	ポスター発表		<table border="1"> <thead> <tr> <th>タイトル</th> <th>著者</th> <th>キーワード</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td><JSMPC2019(2)-1> 日本人の音楽聴取の特徴と個人的属性——音楽ジャンルを中心とした分析——</td> <td>○佐藤典子 (武蔵野音楽大学), 池上 真平 (昭和女子大学), 生駒 忍 (川村学園女子大学), 羽藤 律 (ゆたかカレッジ), 宮澤 史穂 (障害者職業総合センター), 小西 潤子 (沖縄県立芸術大学), 星野 悦子 (上野学園大学)</td> <td>Music Listening, Music Genre, Cognition, Personal Attributes</td> <td>本研究の目的は、国内における性別、年代別の音楽の聴取傾向をとらえることであった。音楽聴取の心理的機能に関する紙面調査およびインターネット調査において同時に質問された、音楽ジャンルごとの聴取頻度についての回答を分析に使用した。性別と年代の二要因の分散分析を行った結果、男女差も一部のジャンルに見られたが、それ以上に年代差が多く確認された。日本における音楽聴取の男女差、年代差について、先行研究と比較し考察を行った。</td> </tr> <tr> <td><JSMPC2019(2)-2> 脳内調性処理における発達初期の音楽聴取経験の影響:日本人バイミュージカルを用いたMEG実験</td> <td>○松永理恵 (神奈川大学人間科学部), 竹下悠哉 (北海道大学大学院保健科学研究院), 横澤宏一 (北海道大学大学院保健科学研究院), ハルトノビトヨ (中央大学工学部), 阿部純一 (北海道大学名誉教授)</td> <td>Tonal schema, enculturation, early experience, bi-musicals</td> <td>聞き手は音楽聴取を通して所属する文化環境に適した音楽知覚能力を学習していくことは明らかになってきたが、その学習における年齢の影響については未知のままである。本稿では、発達初期の音楽文化環境が異なる日本人2群(欧米で生まれ平均6.5歳の時に日本に帰国した群、日本で生まれ育った群)を準備し、西洋音楽の調性処理時の脳活動および日本伝統音楽の調性処理時の脳活動それぞれを群間で比較したMEG実験の結果の一部を報告する。</td> </tr> <tr> <td><JSMPC2019(2)-3> 他者の歌声の知覚とエナクティブ・アプローチ</td> <td>○堀内彩虹 (東京大学大学院総合文化研究科)</td> <td>Phenomenological Research, Enactivism, Embodiment, Singing Voice, Skills and Perception</td> <td>本研究は、これまで哲学の視覚研究で構築されてきた知覚理論であるエナクティブ・アプローチを音楽の聴覚研究に適用する可能性を探ろうとするものである。本研究は音楽の中でも他者の歌声の聴取に焦点をあてる。本論では、エナクティブ・アプローチ理論の概観を示したのち、音楽研究にエナクティブ・アプローチを用いている先行研究を挙げ、音楽のエナクティブ研究の現状の問題点を明示する。その上で、器楽と比較した時、歌声の知覚研究のほうがエナクティブ・アプローチを適用する研究的意義が大きいことを指摘する。</td> </tr> <tr> <td><JSMPC2019(2)-4> 声楽家の歌唱ピッチコントロールにおける聴覚フィードバック攪乱の影響</td> <td>○柚木慧莉, 大澤智恵 (武庫川女子大学音楽学部応用音楽学科)</td> <td>Singing, Pitch control, Auditory feedback, Disturbance</td> <td>歌唱のピッチコントロールにおける聴覚フィードバックの役割を検討するため、歌唱者に妨害音を聴かせることでピッチコントロールの正確性がどのように変化するかを探索的に調査した。実験には声楽専攻の大学生・大学専攻科生が参加し、コンコーネ50番練習曲集の45番をターゲット楽曲として歌唱した。妨害音には、他楽曲の実験参加者自身による歌唱音声を用いた。妨害音があっても多くの場合大きなピッチエラーなく歌うことができたが、同一音符内のピッチ遷移の様相に若干の差異がみとめられた。</td> </tr> <tr> <td><JSMPC2019(2)-5> Doppeldominanteの周波数決定についての考察～純正律の場合～</td> <td>○中井美菜子, 三浦雅展 (国立音楽大学音楽学部)</td> <td>Doppeldominante, 純正律, 聴取実験, 周波数, 自然性</td> <td>Doppeldominanteには主調の属調の七度音が含まれるが、純正律で演奏する場合、その周波数の決定方法は奏者や指揮者の聴感にゆだねられ、明確な基準は存在しない。この研究では、Doppeldominanteの周波数決定のための基準の確立を目指し、合成音を用いた聴取実験を通して、最適な周波数の決定の可能性について論じている。具体的には、正弦波によって造られた合成音による四声体と和声を再生し、音楽大学で和声法について学んだ学生に聴取させ、和声進行内に含まれる Doppeldominanteの和音に関して自然性および嗜好度を回答させている。この調査の集計結果から、Doppeldominante内に含まれる七度音の周波数の決定方法について考察している。</td> </tr> <tr> <td><JSMPC2019(2)-6> ローカルテンポ推定の性能評価および求められる精度に関する考察</td> <td>○橋本まどか (八戸工業大学大学院), 三浦雅展 (国立音楽大学)</td> <td>テンポ推定, ローカルテンポ, 性能評価, 聴取実験</td> <td>楽曲のテンポを計算機によって推定する試みが盛んに行なわれている。このうち性能が高い手法の多くはテンポが固定的な楽曲を対象とした手法であり、テンポが変動する楽曲を対象とした手法については前者に比べ性能は低いとされている。テンポが固定的な楽曲については曲全体から1つのテンポを算出するが、テンポが変動する楽曲についてはテンポ変動が起こることから短時間ごとにテンポを算出するため、推定手法の性能評価においてその手法および精度については議論の余地がある。この報告では、テンポが変動する楽曲を対象としたテンポ推定手法における性能評価の方法と精度について考察している。</td> </tr> </tbody> </table>	タイトル	著者	キーワード	概要	<JSMPC2019(2)-1> 日本人の音楽聴取の特徴と個人的属性——音楽ジャンルを中心とした分析——	○佐藤典子 (武蔵野音楽大学), 池上 真平 (昭和女子大学), 生駒 忍 (川村学園女子大学), 羽藤 律 (ゆたかカレッジ), 宮澤 史穂 (障害者職業総合センター), 小西 潤子 (沖縄県立芸術大学), 星野 悦子 (上野学園大学)	Music Listening, Music Genre, Cognition, Personal Attributes	本研究の目的は、国内における性別、年代別の音楽の聴取傾向をとらえることであった。音楽聴取の心理的機能に関する紙面調査およびインターネット調査において同時に質問された、音楽ジャンルごとの聴取頻度についての回答を分析に使用した。性別と年代の二要因の分散分析を行った結果、男女差も一部のジャンルに見られたが、それ以上に年代差が多く確認された。日本における音楽聴取の男女差、年代差について、先行研究と比較し考察を行った。	<JSMPC2019(2)-2> 脳内調性処理における発達初期の音楽聴取経験の影響:日本人バイミュージカルを用いたMEG実験	○松永理恵 (神奈川大学人間科学部), 竹下悠哉 (北海道大学大学院保健科学研究院), 横澤宏一 (北海道大学大学院保健科学研究院), ハルトノビトヨ (中央大学工学部), 阿部純一 (北海道大学名誉教授)	Tonal schema, enculturation, early experience, bi-musicals	聞き手は音楽聴取を通して所属する文化環境に適した音楽知覚能力を学習していくことは明らかになってきたが、その学習における年齢の影響については未知のままである。本稿では、発達初期の音楽文化環境が異なる日本人2群(欧米で生まれ平均6.5歳の時に日本に帰国した群、日本で生まれ育った群)を準備し、西洋音楽の調性処理時の脳活動および日本伝統音楽の調性処理時の脳活動それぞれを群間で比較したMEG実験の結果の一部を報告する。	<JSMPC2019(2)-3> 他者の歌声の知覚とエナクティブ・アプローチ	○堀内彩虹 (東京大学大学院総合文化研究科)	Phenomenological Research, Enactivism, Embodiment, Singing Voice, Skills and Perception	本研究は、これまで哲学の視覚研究で構築されてきた知覚理論であるエナクティブ・アプローチを音楽の聴覚研究に適用する可能性を探ろうとするものである。本研究は音楽の中でも他者の歌声の聴取に焦点をあてる。本論では、エナクティブ・アプローチ理論の概観を示したのち、音楽研究にエナクティブ・アプローチを用いている先行研究を挙げ、音楽のエナクティブ研究の現状の問題点を明示する。その上で、器楽と比較した時、歌声の知覚研究のほうがエナクティブ・アプローチを適用する研究的意義が大きいことを指摘する。	<JSMPC2019(2)-4> 声楽家の歌唱ピッチコントロールにおける聴覚フィードバック攪乱の影響	○柚木慧莉, 大澤智恵 (武庫川女子大学音楽学部応用音楽学科)	Singing, Pitch control, Auditory feedback, Disturbance	歌唱のピッチコントロールにおける聴覚フィードバックの役割を検討するため、歌唱者に妨害音を聴かせることでピッチコントロールの正確性がどのように変化するかを探索的に調査した。実験には声楽専攻の大学生・大学専攻科生が参加し、コンコーネ50番練習曲集の45番をターゲット楽曲として歌唱した。妨害音には、他楽曲の実験参加者自身による歌唱音声を用いた。妨害音があっても多くの場合大きなピッチエラーなく歌うことができたが、同一音符内のピッチ遷移の様相に若干の差異がみとめられた。	<JSMPC2019(2)-5> Doppeldominanteの周波数決定についての考察～純正律の場合～	○中井美菜子, 三浦雅展 (国立音楽大学音楽学部)	Doppeldominante, 純正律, 聴取実験, 周波数, 自然性	Doppeldominanteには主調の属調の七度音が含まれるが、純正律で演奏する場合、その周波数の決定方法は奏者や指揮者の聴感にゆだねられ、明確な基準は存在しない。この研究では、Doppeldominanteの周波数決定のための基準の確立を目指し、合成音を用いた聴取実験を通して、最適な周波数の決定の可能性について論じている。具体的には、正弦波によって造られた合成音による四声体と和声を再生し、音楽大学で和声法について学んだ学生に聴取させ、和声進行内に含まれる Doppeldominanteの和音に関して自然性および嗜好度を回答させている。この調査の集計結果から、Doppeldominante内に含まれる七度音の周波数の決定方法について考察している。	<JSMPC2019(2)-6> ローカルテンポ推定の性能評価および求められる精度に関する考察	○橋本まどか (八戸工業大学大学院), 三浦雅展 (国立音楽大学)	テンポ推定, ローカルテンポ, 性能評価, 聴取実験	楽曲のテンポを計算機によって推定する試みが盛んに行なわれている。このうち性能が高い手法の多くはテンポが固定的な楽曲を対象とした手法であり、テンポが変動する楽曲を対象とした手法については前者に比べ性能は低いとされている。テンポが固定的な楽曲については曲全体から1つのテンポを算出するが、テンポが変動する楽曲についてはテンポ変動が起こることから短時間ごとにテンポを算出するため、推定手法の性能評価においてその手法および精度については議論の余地がある。この報告では、テンポが変動する楽曲を対象としたテンポ推定手法における性能評価の方法と精度について考察している。
		タイトル	著者	キーワード	概要																										
		<JSMPC2019(2)-1> 日本人の音楽聴取の特徴と個人的属性——音楽ジャンルを中心とした分析——	○佐藤典子 (武蔵野音楽大学), 池上 真平 (昭和女子大学), 生駒 忍 (川村学園女子大学), 羽藤 律 (ゆたかカレッジ), 宮澤 史穂 (障害者職業総合センター), 小西 潤子 (沖縄県立芸術大学), 星野 悦子 (上野学園大学)	Music Listening, Music Genre, Cognition, Personal Attributes	本研究の目的は、国内における性別、年代別の音楽の聴取傾向をとらえることであった。音楽聴取の心理的機能に関する紙面調査およびインターネット調査において同時に質問された、音楽ジャンルごとの聴取頻度についての回答を分析に使用した。性別と年代の二要因の分散分析を行った結果、男女差も一部のジャンルに見られたが、それ以上に年代差が多く確認された。日本における音楽聴取の男女差、年代差について、先行研究と比較し考察を行った。																										
		<JSMPC2019(2)-2> 脳内調性処理における発達初期の音楽聴取経験の影響:日本人バイミュージカルを用いたMEG実験	○松永理恵 (神奈川大学人間科学部), 竹下悠哉 (北海道大学大学院保健科学研究院), 横澤宏一 (北海道大学大学院保健科学研究院), ハルトノビトヨ (中央大学工学部), 阿部純一 (北海道大学名誉教授)	Tonal schema, enculturation, early experience, bi-musicals	聞き手は音楽聴取を通して所属する文化環境に適した音楽知覚能力を学習していくことは明らかになってきたが、その学習における年齢の影響については未知のままである。本稿では、発達初期の音楽文化環境が異なる日本人2群(欧米で生まれ平均6.5歳の時に日本に帰国した群、日本で生まれ育った群)を準備し、西洋音楽の調性処理時の脳活動および日本伝統音楽の調性処理時の脳活動それぞれを群間で比較したMEG実験の結果の一部を報告する。																										
		<JSMPC2019(2)-3> 他者の歌声の知覚とエナクティブ・アプローチ	○堀内彩虹 (東京大学大学院総合文化研究科)	Phenomenological Research, Enactivism, Embodiment, Singing Voice, Skills and Perception	本研究は、これまで哲学の視覚研究で構築されてきた知覚理論であるエナクティブ・アプローチを音楽の聴覚研究に適用する可能性を探ろうとするものである。本研究は音楽の中でも他者の歌声の聴取に焦点をあてる。本論では、エナクティブ・アプローチ理論の概観を示したのち、音楽研究にエナクティブ・アプローチを用いている先行研究を挙げ、音楽のエナクティブ研究の現状の問題点を明示する。その上で、器楽と比較した時、歌声の知覚研究のほうがエナクティブ・アプローチを適用する研究的意義が大きいことを指摘する。																										
		<JSMPC2019(2)-4> 声楽家の歌唱ピッチコントロールにおける聴覚フィードバック攪乱の影響	○柚木慧莉, 大澤智恵 (武庫川女子大学音楽学部応用音楽学科)	Singing, Pitch control, Auditory feedback, Disturbance	歌唱のピッチコントロールにおける聴覚フィードバックの役割を検討するため、歌唱者に妨害音を聴かせることでピッチコントロールの正確性がどのように変化するかを探索的に調査した。実験には声楽専攻の大学生・大学専攻科生が参加し、コンコーネ50番練習曲集の45番をターゲット楽曲として歌唱した。妨害音には、他楽曲の実験参加者自身による歌唱音声を用いた。妨害音があっても多くの場合大きなピッチエラーなく歌うことができたが、同一音符内のピッチ遷移の様相に若干の差異がみとめられた。																										
<JSMPC2019(2)-5> Doppeldominanteの周波数決定についての考察～純正律の場合～	○中井美菜子, 三浦雅展 (国立音楽大学音楽学部)	Doppeldominante, 純正律, 聴取実験, 周波数, 自然性	Doppeldominanteには主調の属調の七度音が含まれるが、純正律で演奏する場合、その周波数の決定方法は奏者や指揮者の聴感にゆだねられ、明確な基準は存在しない。この研究では、Doppeldominanteの周波数決定のための基準の確立を目指し、合成音を用いた聴取実験を通して、最適な周波数の決定の可能性について論じている。具体的には、正弦波によって造られた合成音による四声体と和声を再生し、音楽大学で和声法について学んだ学生に聴取させ、和声進行内に含まれる Doppeldominanteの和音に関して自然性および嗜好度を回答させている。この調査の集計結果から、Doppeldominante内に含まれる七度音の周波数の決定方法について考察している。																												
<JSMPC2019(2)-6> ローカルテンポ推定の性能評価および求められる精度に関する考察	○橋本まどか (八戸工業大学大学院), 三浦雅展 (国立音楽大学)	テンポ推定, ローカルテンポ, 性能評価, 聴取実験	楽曲のテンポを計算機によって推定する試みが盛んに行なわれている。このうち性能が高い手法の多くはテンポが固定的な楽曲を対象とした手法であり、テンポが変動する楽曲を対象とした手法については前者に比べ性能は低いとされている。テンポが固定的な楽曲については曲全体から1つのテンポを算出するが、テンポが変動する楽曲についてはテンポ変動が起こることから短時間ごとにテンポを算出するため、推定手法の性能評価においてその手法および精度については議論の余地がある。この報告では、テンポが変動する楽曲を対象としたテンポ推定手法における性能評価の方法と精度について考察している。																												
16:20	休憩 (10分)																														
16:30	特別講演 座長：武山泰 (八戸工業大学)	タイトル未定	安原清友 (八戸市庁)																												
17:30	1日目終了																														
19:30	懇親会開始	八戸中心街にて																													

11月10日(日)

		タイトル		著者	キーワード	概要
10:00	口頭発表セッション1 座長：松井淑恵 (豊橋技術科学大学)	<JSMPC2019(2)-7>	ポピュラー音楽の生演奏における鑑賞者の心拍変動の分析——音楽による気分調整方略との関連——	○正田悠 (神戸大学大学院国際文化学研究所), 小澤日向子 (神戸大学国際文化学部)	生演奏、ポピュラー音楽、心拍変動、音楽による気分調整尺度、階層線形モデル	大学生のライブ参加における心理・生理的变化を評価するとともに、演奏から知覚される感情的性質や鑑賞者自身の音楽による気分調整方略との対応関係を調べた。大学生19名にライブハウスにおいてポピュラー音楽6曲を鑑賞してもらった。メタル音楽を聴取した後はポジティブ感情が上昇し、J-Popや邦ロックではネガティブ感情が低下した。心拍関連指標の変化は明確には認められなかった。階層線形モデルによって、演奏に含まれる感情的特徴および鑑賞者自身の特性がともに生演奏における心理・生理反応に影響を及ぼしていることが明らかになった。
		<JSMPC2019(2)-8>	内受容感覚の精度と感度が音楽の感動に与える影響	◎前川亮 (広島大学 脳・こころ・感性科学研究センター), 乾敏郎 (追手門学院大学 心理学部)	music, interoception, impression, heartbeat tracking	感情は身体状態のホメオスタシスおよびアラスタシスにより生じるものであり、身体状態を知覚する内受容感覚が感情生起の基礎にあると考えられている。一方、プロの音楽家は内受容感覚に優れることが報告されており、音楽によって生じる感動体験にも内受容感覚が影響することが予測される。本研究では、心拍知覚を用いた内受容感覚の精度および感度の測定結果と、音楽聴取時の感動評定値を比較することで、内受容感覚が感動に与える影響を調べた。結果、内受容感覚の精度である心拍追跡精度と感動評定値のレンジに相関があることがわかった。内受容感覚は感動を認識するうえで重要な働きをしていることが示唆される。
		<JSMPC2019(2)-9>	Williams症候群児における音楽能力と言語スキルの発達の関係	◎北村柚奏 (東京学芸大学大学院教育学研究科, 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所), 北洋輔 (国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所, ヘルシンキ大学医学部), 奥村安寿子 (国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所, 日本学術振興会), 加賀佳美 (国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所), 奥住秀之 (東京学芸大学教育学部), 石川裕司 (東京学芸大学教育学部), 中村みほ (岡崎市こども発達医療センター), 稲垣真澄 (国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所)	Williams syndrome, pitch discrimination, musical ability	Williams 症候群児における音高弁別能力と言語スキルの発達の関係について、音高弁別課題を用いて調べた。その結果、彼らの音高弁別能力は、言語スキルが低い時期には想定されるよりも高いが、一定の言語スキルを獲得した後は、そこから想定されるよりも低くなることが示された。これらの結果は、定型発達児とは異なっており、WS 児における非定型な音楽能力と言語スキルとの発達の関係を示すものである。本研究の結果は、WS 児に音楽療法・教育を実施する前に、言語スキルや他の認知能力と併せて、音楽能力を評価することの重要性を示唆している。
11:15	休憩 (10分)					
11:25	口頭発表セッション2 座長：池上真平 (昭和女子大学)	<JSMPC2019(2)-10>	「THE IDOLM@STER」における楽曲と衣装の調和感に関する研究	◎高岡良, 平出勇太, 山田真司 (金沢工業大学大学院)	Semantic congruency, Character song, Stage costume, THE IDOLM@STER, Semantic differential method	本研究ではゲームコンテンツである「アイドルマスター」におけるキャラクターのキャラクター・ソングと、これらのアイドルが着用するステージコスチュームの印象を、SD 法を用いた知覚実験により調査した。第1セッションでは「アイドルマスターテラスターズ」に登場する36人のキャラクターの3Dモデルを刺激として使用し、第2セッションでは116種類のステージ衣装と36曲のキャラクター・ソングを用いて実験を実施した。その結果、これらの刺激の知覚印象は、「活発さ」、「美しさ」、「凛々しさ」の3因子で説明できることが示された。第3セッションでは、キャラクター・ソングとステージコスチュームの調和感を調査し、その結果、衣装と楽曲の両方に高い美しさを持つ事が、両者の調和感に最も重要であることが明らかになった。
		<JSMPC2019(2)-11>	ビートのチャンキングが2人リズム維持課題のテンポ逸脱に及ぼす影響	◎岡野真裕 (立命館グローバル・イノベーション研究機構)	Inter-tap intervals, Joint rushing, Sensorimotor synchronization, Interpersonal coordination, Phase and period correction	一定テンポでの運動をメトロノーム無しで維持する課題(リズム維持課題)を複数人で同期しながら行うと、単独で行う場合よりテンポが加速しやすいという現象が近年報告されている。本研究ではリズム維持課題において、パートナーの有無および「複数のビート(4つまたは8つ)をひとまとまりと考える」という方略が、テンポ逸脱の度合いに影響するか検討した。単独条件では加速、減速、その繰り返しなど様々な逸脱パターンが現れた。一方2人組条件では、逸脱のパターンが加速に偏った。特にビートのまとまりを大きくとらえるほど加速しやすいという傾向が認められた。
12:15	授賞式・開会挨拶	12:45頃に終了予定				

※口頭発表の持ち時間は1人25分(発表18分、質疑応答5分、交代2分)です。

○は発表者、◎は研究選奨の対象者です。